

東京学芸大学附属国際中等教育学校

多文化共生社会の実現を支える 組織力・対話力・実行力の育成

【構想の概要】

「リスク」「葛藤と軋轢」「教育」を大テーマとした課題研究を通して、複雑化する現代社会および未来につながる課題解決に主体的に取り組むために必要なコンピテンシー特に「組織力」「対話力」「実行力」を養い、それを活かしたアクションを起こせる生徒を育成する。①後期課程の課題研究の体系を整備し実践する。学習領域「国際教養」において、生徒の課題研究をより継続的・段階的に発展させるためのカリキュラムを構造的に整える。②課題研究についての専門的な質の向上と「ポストアクティブラーニング：教室の外に展開する学び」をねらいとした外部連携を強化し、生徒の課題研究を中核として、それを深化させるために、学校と外部組織とが相互に関わりあう機会を設けネットワーク化する。③生徒の資質・能力を育成し、適切に評価するための規準の確立。またそれらを含めた「学びの地図」の構造化。作成にあたっては外部組織と連携し、これからのグローバルリーダー育成に関わるステークホルダーの意見を取り入れる。



SGH事業全体は後期課程全生徒を対象とする。課題研究は生徒が自主的にSGH領域とSSH領域を選択することができる。学校設定科目のGlobal Issues や国際Aは選択履修科目である。

第4学年【2016年度】																																																		
英語			地理・公民			数学			理科			保健体育			外国語			芸術			情報			国際教育・外国語			H R			キャリア教育																				
国際総合			現代社会			数学A			生物基礎			化学基礎			体育			芸術1			情報の科学			G1			国際総合				H R																			
			地理A			数学I			生物基礎			化学基礎			体育			芸術1			情報の科学			国際総合			H R																							
			地理A(2M)			数学I(2M)			生物基礎			化学基礎			体育			芸術1			情報の科学			国際総合				H R																						
4			2			2			2			2			2			2			2			2			2			2			2			2														
『地理A』『数学A』はイマージョン授業の選択も可能です。『科学と人間生活(2M)』はイマージョン授業として履修します。																																																		
第5学年【2017年度】																																																		
英語			歴史			数学			数学・物理			理科			保健体育			芸術			外国語			国際教育・外国語			H R			キャリア教育																				
現代社会B			芸術B			世界史A			日本史A			数学II			物理基礎			化学基礎			体育			芸術基礎			英語II(2M)				英語II(2M)			H R																
			世界史A(2M)																												H R																			
																											H R																							
2			2			2			2			2			2			2			2			2				2			2			2			2													
『世界史A』『数学B』はイマージョン授業の選択も可能です。『生物I(2M)』はイマージョン授業として履修します。																																																		
第6学年【2018年度】																																																		
体育			外国語・英語			英語表現基礎			現代社会			芸術B			世界史B①			日本史B①			地理B①			政治・経済			芸術B			情報			数学・物理			化学			生物			数学基礎			H R					
英語表現基礎			英語表現基礎			英語表現基礎			現代社会			芸術B			世界史B①			日本史B①			地理B①			政治・経済			芸術B			情報			数学・物理			化学			生物			数学基礎			H R					
英語表現基礎			英語表現基礎			英語表現基礎			現代社会			芸術B			世界史B①			日本史B①			地理B①			政治・経済			芸術B			情報			数学・物理			化学			生物			数学基礎				H R				
英語表現基礎			英語表現基礎			英語表現基礎			現代社会			芸術B			世界史B①			日本史B①			地理B①			政治・経済			芸術B			情報			数学・物理			化学			生物			数学基礎					H R			
英語表現基礎			英語表現基礎			英語表現基礎			現代社会			芸術B			世界史B①			日本史B①			地理B①			政治・経済			芸術B			情報			数学・物理			化学			生物			数学基礎						H R		
3			5			7			9			11			13			15			17			19			21			22			24			26			28			30			31				32	
『世界史B①』『地理B①』『政治・経済』『芸術B』『情報』『数学・物理』『化学』『生物』『数学基礎』はイマージョン授業として履修します。																																																		

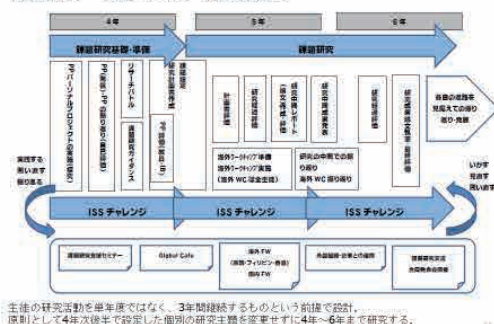
「課題研究」テーマ設定の理由

本校の課題研究のテーマは「リスク」「葛藤と軋轢」「教育」である。これら概念的なテーマを設定したことにはいくつか理由がある。一つは現代社会の問題が非常に複雑であり、それらの解決は一側面からの単純なアプローチでは見込めないということがある。例えば世界が抱える「リスク」はそのカテゴリーさえも難しいほど多岐に亘りしかもあらゆる分野のリスクが影響し合っている。問題の解決はリスクマネジメントやリスクに対するレジリエンスを備えることにあると言われるが、特定の領域のリスクを見ているだけでは問題の大きさは見えてこない。要は包括的な視野の広さや多様な文脈でリスクをとらえることが必要なのである。本校があえて概念的な研究テーマを設定しているのは、本校が包括的な学びを理念とするIB校であるということもあるが、生徒にそのような視野や姿勢を獲得させるためである。さらに言えば、概念的な研究テーマは生徒の課題意識を焦点化させることはあっても矮小化しない。生徒が関心を持つ事柄や問題意識は常に動的な状態にある。それらが散漫になったまま希薄にならないように焦点化する必要はあるが、狭小な枠にはめてしまうことは課題意識を削ぎ狭める危険性もはらむ。そうした意味で本校の課題研究テーマは生徒一人一人が持っている関心や問題意識を尊重しながら、それらを「課題」として焦点化することに役立っている。

「課題研究」を支えているカリキュラム

本校のSGH「課題研究」は総合的な学習の時間を軸として実践されている。3年間の「課題研究」がどのように展開していくのかは図①に示す。本校が特に重視しているのは課題研究ガイダンスである。IBのパーソナルプロジェクト（PP）の実施によって研究の基礎は経験するが、本校ではさらに研究倫理についての理解の徹底や論文作成の基本などを追加し、再度ガイダンスを行っている。これはPPを終えた生徒にとっては振り返りの機会ともなる。この振り返り→改善へというサイクルを持つ指導カリキュラムが課題研究の深化を促していると言える。

課題研究 指導モデル（後期課程）



（図①）

また生徒はすべての教科の学びは課題研究の支えとなっていると認識している（図②）が、特に外国語科の科目・社会科の科目・学校設定教科「国際」の科目「国際A」「国際B」の役割は大きい。



（図②）

外国語科の取組としては英語の授業や学校設定科目 Global Issues で国際的な社会問題などを取り上げ、プレゼンテーションやディスカッションといった活動を通して学んでいる。こうした授業においては英語を学ぶこともさることながら調査などの方法を学ぶことも可能になっている。多言語による資料分析を通して自分たちとは違う観点（Perspective）で問題を捉えている世界の人々の意見に触れることもできている。これは後期課程の授業に限ったことではなく、前期課程から取り組まれていることである。

「国際A」や「国際B」では「国際協力と社会貢献」「ファシリテーション実践」などの講座を備え、外部講師を積極的に招へいし、校外の組織とも連携することで企業の事業評価を実際に行い、寄付金の行先を自分たちで決定するなど実践的な学びができるような年間の指導プログラムを設計している。

・「余白」の時間の重要性

前掲の教育課程表にある通り、本校では5年生・6年生の段階で非常に多くの選択履修を可能として

いる。もちろん卒業認定に必要な単位数の下限は設定しているが、生徒は自分で自分の時間割を作ることが可能である。また、授業日数は週5日であり、土曜授業は行っていない。こうしたカリキュラムのあり方には賛否両論あろうが、本校の特色はこうした点にあり、また主体的で責任感のあるグローバルリーダーもこうした自由さが生み出すと考えている。時間割を自分で作るということは自分で学びを構築するということに他ならない。こうして生み出された余白の時間や放課後の僅かな時間そして自由になる土曜日や日曜日を駆使して、生徒は自由に発想し、外部の組織とつながりを作り、校外で様々な体験をする。本校の生徒にとっては余白の時間があることが学びを深め進化させることにつながっている。

海外研修の意義

課題研究を支えるための重要な取組の一つが海外研修である。本校で行っている海外研修は以下の通りである。

- ・夏季（7月～8月）英国研修
- ・春季（2月～3月）フィリピン研修
- ・春季（3月）香港研修

このほかに、5年次11月に学年全員が参加するカナダへのワークキャンプを行っている。カナダワークキャンプについてはSGHやSSHの経費支援を受けない学校独自の研修であるが、プログラムの内容面ではSGH課題研究と連動している。



左：フィリピン教育
大学でのワーク
キャンプ



左：フィリピンにて
路上の子どもたち
だった現地の青年た
ちが自分たちで立ち
上げた事業を訪ね、
合同ワークショップ
を開催

それぞれの研修は次のように運営されている。

(1) 実施目的

・SGH海外研修は、課題研究のフィールドワークおよび海外での研究発表の機会を得ることを目的としている。カナダワークキャンプではSGH指定校となってからは現地校でのディスカッションテーマに課題研究テーマや国際社会問題が盛り込まれている。

(2) プログラムの内容

・英国研修はUCL (University college London) が主催するプログラム UCL Grand Challenge の一部に参加する。このプログラムのテーマは本校の課題研究テーマとも強い親和性があり、生徒は現地の高校生たちとディスカッションを行い、現地のシンポジウムで発表を行う。

・フィリピン研修での大きなテーマは「貧困のリスクと新興国の葛藤」である。生徒は各自の具体的な研究課題に応じて現地でフィールドワークやインタビューを行う。また現地校や現地の大学とのワークショップも開催しており、フィリピンの学生と討論を行うことで課題研究を振り返る機会ともなっている。

・香港研修のテーマは「先進国の抱えるリスクと軋轢」である。主としてフィールドワーク（インタビュー）と現地校・大学でのワークショップを実施している。政治的な複雑さを持つ地域でチャレンジングな問い（例えば民主化運動や原発問題など）について現地の学生と討論することで思考の深まりと社会的政治的な問題に対する視野の拡大をねらいとしている。

ISSチャレンジ

課題研究を支える取り組みとして校内コンペティション「ISSチャレンジ」を開催している。毎年年度当初にエントリーを行い、1年間の研究の成果を審査し最終的に4組のファイナリストが全校の前でプレゼンテーションする公開審査会が年度末に行われている。参加資格は1年生から6年生までの全員であり、課題研究への強い動機づけともなっている。

外部連携

課題研究を支えている存在として外部の有識者や

組織がある。当初は学校が外部連携先を探してきて生徒に情報提供していたが、研究開発が進むにつれて生徒がその存在に重要性を自覚し、自ら外部に連絡を取り協力や助言を依頼し、連携受諾を得てくるケースが増えている。2017年度からはJICA・日本マイクロソフトが生徒の活動を直接支援してくださっている。また学校としても指導カリキュラムの開発を外部組織と連携して構築することを開始しており、2018年度からはチームラボ株式会社と連携して指導プログラム構築を行う。

課題研究の評価

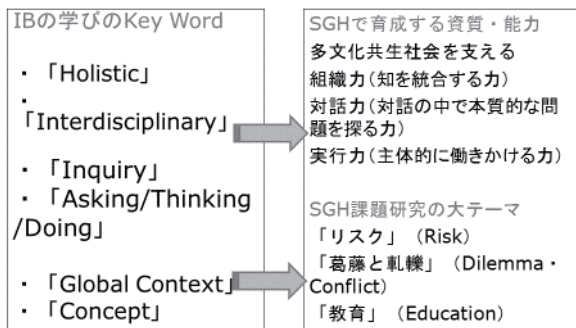
課題研究の評価は「計画・経過・最終成果」の3段階で行い、基本的にはそれぞれの段階におけるルーブリックを用いて評価する。ただし、昨年度ISSチャレンジにおける課題研究の評価を分析した結果としてメンターや外部評価者（外部連携者）の評価コメントが生徒の課題研究の質的向上に強い影響を与えることが分かっている。本校ではISSチャレンジに参加している生徒については各評価段階で必ず2名以上の評価者からコメントによるフィードバックが受けられることになっており、外部の専門家などから助言を受けられる「外部評価会」も設けている。

SGH×IBの学び

本校におけるIBの学びとSGH研究開発は図③に示すような親和性がある。

IBMYPによる学びは本校の教育の基盤であり、

SGH研究開発とIBの学び



(図③)

「理念」「指針」「フレームワーク」と言える。その役割は探究的な学びを実現するための方向性を示すことである。一方SGH研究開発はIBの理念や方針を基盤としながら探究的な学びをどのような実践によって組み立てていくかを考える実践的教育研究開発と言える。例えば本校では年度末に課題研究を通してどのようなスキルが身に付いたと実感するかという調査を生徒に対して行っている。この時に使う指標はIBのATL (Approaches to learning) スキルである。教科の単元設計や学習指導で使用されているものと共通する指標を使うことは教科学習との連動性をより高め、教員間の連携や意識共有の助けともなる。また課題研究テーマの概念的性質がIBの包括的な学びと関わっていることは前掲の通りだが、さらに言えば、課題研究の過程において問題や課題を「文脈：Context」によってとらえるようとする姿勢が見えることもIBの単元設計の要素であるGlobal Contextの影響があるだろう。文脈的な捉え方を鍛えていくことは他者理解・異文化理解にもつながる。多文化共生社会においてグローバルリーダーとしての役割を担うには欠かせない素養である。

数字に見るSGH×IBの成果

・大学院を含めた海外進学の意志を持つ生徒の増加
指定1年次 9% (28名)
→指定3年次 21% (72名)
・将来海外で働きたいという生徒の増加
指定1年次 25% (77名)
→指定3年次 30% (105名)
・海外大学進学者の増加
合格数：30大学・33人
進学者数：13名
・海外大学進学者向け奨学金獲得数の増加
JASSO 日本学生支援機構海外留学支援制度：6名
グローバルクロフト奨学金：2名
柳井正海外奨学金プログラム：3名+学校推薦枠増

上図に示したものの他、2017年度の特徴的な成果としては後期課程のみで英検1級保持者が102名・準1級保持者が120名となったことがある。SGHの活動に取り組む生徒にとって英語がコミュニケーションのツールとなっていることを示す数字である。